

知識、文化、そして自らを〈換算〉する —モンゴル帝国のユーラシア統治—

講演者：諫早庸一（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター助教）

ディスカッサント：小澤実（立教大学文学部教授）

司会進行：海野典子（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科講師）、秋山徹（北海道教育大学教育学部釧路校准教授）、飯山知保（早稲田大学文学学術院教授）



【日時】 2023 年 5 月 27 日（土） 14：00～16：30

【プログラム】

- 14：00～14：10 開会挨拶（秋山徹）
- 14：10～15：10 講演（諫早庸一）
- 15：10～15：25 休憩
- 15：25～15：45 コメント（小澤実）
- 15：45～16：25 全体討論
- 16：25～16：30 閉会挨拶（飯山知保）

【会場】

早稲田大学戸山キャンパス33号館3階第1会議室

※対面式で開催、事前登録不要

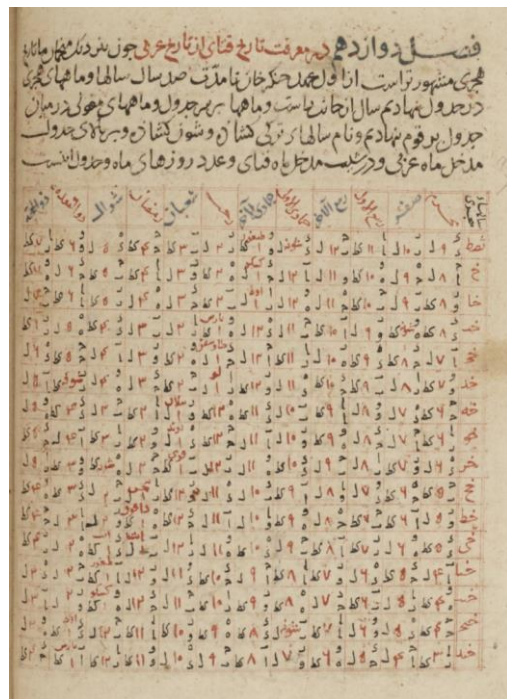


【共催】

早稲田大学中央ユーラシア歴史文化研究所

【講演趣旨】

1206年にモンゴル高原の諸部族を糾合し、帝国の祖となったチンギス（在位1206～1227年）とその後継者たちはその後わずか半世紀ほどのあいだに、中国・中央アジア・ロシア・イランといった地域を直接支配下に置く、史上最大の陸上帝国を現出させた。モンゴルのユーラシア統治は、その支配領域の各地において通行税その他の課税や道中の略奪者たちを取り除き、地域間交流をそれ以前にはない規模で高めることとなる。モンゴル帝国（1206～1368年）の建設によって創出されたこのような状況は、よく「パクス・モンゴリカ（モンゴルの平和）」と表現される。本講演では、この「パクス・モンゴリカ」のなかでのモンゴルの達成を〈換算（conversion）〉と表現したい。モンゴル帝国はユーラシアの人・物・情報の〈換算〉を実現した。その例は、銀塊や銀貨、紙幣といった貨幣、重さや長さといった度量衡や、旧約聖書・イラン神話・ユーラシア遊牧伝承をあわせた歴史、さらには暦や宗教、言語・文書にまでわたる総体的なものであった。モンゴル帝国による〈換算〉とは、いかなる特徴や意義を有しているのだろうか。それを種々の政治・経済・文化的要素や、近代帝国との比較のなかでみていきたい。



『イル・ハン天文便覧』のヒジュラ暦⇄中国暦換算表